
火事と喧嘩が江戸の華!?

X X G

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

火事と喧嘩が江戸の華！？

【Nコード】

N95780

【作者名】

XXG

【あらすじ】

『喧嘩屋』と皆に呼ばれ親しまれ、街に蔓延る悪党たちを正義の拳、剣、銃（、ペットボトル）で倒す正義の六人の若者たちの物語。アニメなどのパロディネタはありませんが、ギャグ多めかもしれません。

第一話プロローグ「停電騒動」(前書き)

初投稿のX X Gと申します。

まだまだ未熟ですが、読者の方が笑って楽しめるような作品を書いていきたいと考えています。

第一話プロローグ「停電騒動」

これは、『喧嘩屋』と皆から呼ばれ親しまれ、街に蔓延^{はびこ}る悪党たちを正義の拳、剣、銃（、ペットボトル）で倒す、正義の六人の若者たちの物語である。

「はあ、はあ、はあ、はあ……」

今、^{ふたしろ}双城春輝^{はるき}という少年と、他数名は薄暗いデパートを疾走していた。

「まったく、なんなんだよお、このデパートは！ と、息を切らしながら春輝は心の中で毒づくのだった。

先程まで、春輝とその他数名はこのデパートにて休日を買物をして過ごしていた。

しかし、会計も終わりさあ帰るかという時にデパートが停電したのだ。

「ねえ、^{つよし}毅、本当に犯人とやらはこの先にいるの？」

春輝は走りながら目の前を走っている大柄な男に訊ねた。

今こうして走っているのは、停電直後にこの毅と呼ばれた男が

『この停電は人為的なものだ！ 犯人を捕まえるぞ！』

などと叫んだからであり、その根拠は他ならぬ勘であり、春輝には普段から外れまくるこの男の勘がどうしても信じられないのだった。

「ああ、絶対にいる。俺の勘はここぞというときには必中だ」

春輝の不信など知らず、毅と呼ばれた男は自信満々に応えた。

すると春輝の隣を走っていたやや小柄な少年が呟いた。

「でもこいつ、試験の山外しまくるよな」

「きつと毅にとって、試験なんて取るに足りないものなんだよ……」
と春輝。

実際は萩野毅はぎのつよしの成績は惨憺さんたんたるものであり、それを知っている故、誰もがこの男の勘は信じるに値しないと思っていた。

しかし、暫く後、彼らは今までの認識を改めざるを得なくなるのであった。

……

走り出して数十秒後、彼らは真つ暗闇のフロアの前に到達していた。

真つ暗闇を目の前にして、春輝は思うのだった。

なんか、この中ヤバそうじゃない？　なんか、本当に犯人が
いそうな雰囲気じゃん。

春輝らが立つ先はデパートの電力を賄まかなう電力室への道。窓はブラインドがかかっており、蛍光灯は停電のため点灯しておらず、道にはただただ暗闇が満ちていた。なんかこう、まるでラスボスがでてきそうな雰囲気だった。

予備電源は点かないのかな、と思ったが、これだけ時間が経っても点かないならば恐らくはそちらにも何らかの異変があったのだろう。

「この先に、いる！」

毅が一人で頷く。

予備電源が点かない以上、春輝含む他数名もやや人為的説を信じ始めていたので、ここで特に反論は起こらなかった。

「で、どうするんだ、萩野」

すぐさま突っ込んで行きそうな毅に話し掛けたのは、スラリとした長身の、眼鏡を掛けた男。腰には何故か木刀を差している。

「何がだ？　宗介そうすけ」

「まさかこのまま無策に突入する訳でもあるまい」

しかし残念ながら、この毅という男は宗介と呼ばれた男が考えていた程マシな頭ではなかった。

「ダメなのか？」毅は首を傾げる。

「宗介、毅はRPG風に言えば“こうげき”のコマンドしかないキヤラなんだよ」とこれは春輝。

「いや、まあ、知ってはいたが」

春輝に応えつつ、宗介が提案する。

「この場所に誰かを残して行くべきだと思っただが？」

「ん？ なんでだ？」毅が再び首を傾げる。

「もし本当にこの中に犯人がいるのなら、デパートの構造上窓でも破らなければここさえ守れば逃げられることはないだろう？」

確かに宗介の言う通り、電力室はデパートの外れにあり、出るにはここを通らざるを得ない。しかし、何故宗介がデパートの内部構造に詳しいのかも謎である。

「つまり待ち伏せか」

小柄な少年がなるほどといった様子で頷く。

「そうだ。そして、ここには俺が残ろうと思う」

「まあ、藤堂とうどうなら萩野はぎのみたいにアホじゃないし、喧嘩強いし」適任だな、などと小柄な少年は一人で頷く。

「おい慶けい、俺をアホと言ったか？」

毅が小柄な少年に詰め寄る。

「事実だろ」

しかし慶と呼ばれた少年 すぎさわけいち 杉澤慶一は動じず、「まあな」と応

じてしまう毅も毅ではある。

「さて」と息切れが回復した春輝が話を戻す。「他に誰が残る？」

犯人がもし複数いた場合、いくら戦闘力の高い宗介とは言え一人では厳しいということもあるかもしれない。それ故の春輝の問い掛けだった。

すると今まで黙っていた春輝の後ろにいた者が手を挙げた。

「私とあやつちが残る！」

女子の声と共に、挙げた手はあやつちと思わしきもう一人の女子の腕に回される。

「OK、んじゃ宗介と遥、はるか菫蒲が居残り組だな？」あやめ毅が確認する。

「……え、私も……？」

自分も残ることになって、あやつち、菫蒲と呼ばれた女子は動揺している。

手を挙げた女子はふたしほはるか双城遥、腕を回された女子はやまなし月見里菫蒲である。

動揺する菫蒲とは逆に、ナイス遥！流石我が妹！ と心の中で嬉しそうに叫び始める春輝がいた。

「わ、私なんかでよよよろしいのでですか……？」

宗介の方を見て、あやつちが頬を赤らめ半ばラップ口調になりつつも問い掛ける。

「俺は構わない」

「……遥、今度何か好きなもの買ってあげるから」

宗介はクールに返し、その脇で春輝は遥の頭を撫でていた。

「で、ではご一緒させて頂きます……」

俯いているが、菫蒲の表情は心なしか嬉しそうだった。

春輝も嬉しそうに心の中で『遥ファインプレー！』と叫びまくっていた。

「さて」と言うのは今度は毅である。「そろそろ行くぜ」

無論電力室内部へだが、明かりはない。

「明かりなし？ 危くない？」

「こいつを使え」

春輝の懸念に応じたのは慶一だ。バッグから取り出した、懐中電灯を二つ持ち上げる。

何故に仮にも買物に来たのに、バッグに懐中電灯なんて入っているのか謎だ。しかも二本。

しかし、今更そんなことには春輝もツッコまなかった。慶一のバツグに色々と言の分らない物が入っているのは既に周知の事実だからだ。

「よし、行くぞ！」

そして毅の掛け声と共に、三人は懐中電灯の明かりを頼りに再び走り出すのだった。

……………

「あつ」

暗闇の中、一番前を走っていた毅が急に立ち止まった。

そのすぐ後ろを走っていた春輝は、止まれず毅に思いつ切りぶつかってしまふ。

「……！」

しかし体つきの違い故、春輝のみが一人後ろに派手に吹っ飛んだ。「ちよつと、毅！ 急に止まると危ないじゃないか！ てか過去進行形で危なかった！」

起き上がって春輝は抗議する。

しかし毅は抗議を気にも止めず、前方を見つめて一言。

「おい、アレ、何だ？」

「アレ？」「アレ？」

毅の指差す方を見ると、そこには移動する光があった。

今、こんなところを懐中電灯ありでうろついている人。それは？

「……まさか！」

春輝には犯人しか思い当たらなかった。

「そつだ、犯人に違いねえ！」毅が力強く頷く。

まさか、毅の勘が当たるなんて。と春輝と慶は改めて驚いた。

「さあ、奴を捕まえるぞ」

「懐中電灯は消した方がいいな」と慶一。

懐中電灯を消し、三人は足音を立てないようにして移動中の光を目指し、慎重に歩を進める。

幸い、光の主は歩みが遅く、簡単に距離を縮められた。

そして後一步で相手に手が届く、剣道で言えば“一足一刀の間”に毅が入った瞬間

ガシャン！

「何だ！？」

大きな物音　何か硬い金属製の物が床に落ちたような音が後ろの方で鳴り響き、目の前の光はこちらへ向いてしまう。

「うおっ！　まぶし　」

「誰だお前等は！」

鋭い男の声が光の主から発せられた。

眩しくてよく見えないが、背丈はそう高くなく、帽子を被っているようだった。

ただし、帽子と言ってもよくドラマで犯人が被っているようなものではなく、寧ろ警察官とか警備員の人が被っているようなものだった。

帽子を視認した三人は彼がパートの警備員だとすぐに悟った。

しかし　約一名、致命的な勘違いをしたままの馬鹿がいた。

「お前が犯人か！」と毅。

「違う！」「違う！」

思わず春輝と慶一は二人掛かりで思いつ切りツツコミを入れるが、事態はそんなことをしている暇などないように動いていた。

「何をふざけたことを！　この悪ガキ共め！」

目の前にいた警備員が襲い掛かってきたのだ。

「ぬおっ！」

毅はギリギリのところまで警備員の攻撃を避ける。動きは中年のような声からは想像できない程素早く、流石は警備員だなと後ろで見

ていた二人を感心させた。

って、感心なんかしてる場合じゃない！

「ここは逃げるよ！ 毅、慶！」

誤解されてるみたいだけど、捕まったら本当の犯人に騒ぎに乗じて逃げられてしまうかもしれない。そう考えての春輝の逃走開始だった。

「クソツ！」「しゃあねえ！」

そして二人もその後ろに続いた。

.....

「暇だなー」と、小声で独りごちるのは遥だった。

走るのは疲れるし、あやつちの援護はこなしだし、残ったのは正解だったとは思う。でも

遥が後ろを振り返ると、微動だにせず、何の言葉も交わさない二人が立っていた。

「こつも黙られるとなあ.....」。

「春兄はるにい、今あつちで何やってるかな？ 犯人とドッグレース中かな？」

そして小声で呟き、

「.....。暇だなあ.....」
再び独りごちた。

.....

当の春輝たちは、只今警備員とのドッグレースを終えたところだった。

「はあ、はあ。もう、追い掛けて来ない、よね.....」

息を切らすのはまた春輝だった。ざつと二百メートルは全力疾走したので、運動不足気味な春輝にはかなり堪える。

一方慶一は息を乱す程度で、毅は走る前と何の変わりもなかった。「なんだ、これっぽちで息上がるのか？ お前ら体力ねえなあ」「いや、萩野、普通、これくらい全力疾走したら息上がるもんだろ」毅と慶一が話しているうちに、春輝は安全を確認するために物陰から少し顔を出して逃げてきた方を覗き見る。

そちらには光はなかった。

「よし、ひとまずは逃げきれたね」

「……しかし、どうするかね。そろそろ置いてきたあいつらも暇を
持て余してるんじゃないか？」慶が言った。

そうだね、と頷いてから春輝が引き継ぐ。

「警備員の人がいるってことは、やっぱり犯人はここにいるのかも
しれない。だから、僕たちはここで犯人を捜すのがいいんじゃない
かな」

「だが、どうやってだ？」とこれは毅。

うーん、と思案し春輝が続ける。

「さっきみたいに明かりを捜せばいいんじゃないかな。ここを動く
のに明かりは必須だし、多分犯人は多数だから、僕たちみたいに複
数明かりがあつたら多分それだと思う」

春輝が述べると、また毅が疑問を示した。

「ちよつと待った。何で犯人は複数なんだ？」

「そりゃ補助電源も同時にぶっ壊してんだ、一人でできる真似じゃ
ない」とここは慶一が説明。

なるほど、と頷いて毅は懐中電灯を再び点けた。

「じゃ、そろそろ捜しに行くか」

「OK」「了解」

果たして、捜していたものはすぐに見つかった。

捜し始めて数秒後、前方に五つの光点が発見されたのだ。

「距離……は大体五十メートルくらいか」

「そうだね……。明かりの数からして最低でも五人。これはかなり

怪しいね」

「ま、警備員はそんな大勢でいる必要はないもんな」

三人は念のため、歩きつつもターゲットに気付かれないうつ、小声で会話していた。

「もう少し距離を詰めたらバトル開始だ」と毅。

「でも毅、自分で言っておいてなんだけどまた警備員の人たちだけだらどうする？」

「その時はその時だな」

毅には何ら懸念の様子は見られない。

春輝は少し更に心配になるが、ここで「ソーソー」と慶一が毅に同意した。

「いざとなれば俺の携行兵器フル稼働で問題ない」

「そんな物騒な。てか簡単にそれ犯人バレそうな気がする」と春輝が言った時、毅が手を挙げ制止した。

「そろそろ話は止めだ」

距離的には、五つの光へは後二十メートル程にまで近付いていた。俺が叫んだら作戦開始で」

作戦なんてものは春輝も慶一も聞いていない。しかしまあ、とりあえずノリで頷いておく。

「とりあえず携行兵装のセーフティは外した」

再び物騒なことを呟く慶一は気にせず、春輝は前を見据える。

明かりは未だ五つ視認できる。五人いたとして、半分も抑えれば後は宗介たちがやってくれるだろう。

そうこう考えていくうち、五つの光点と三人の距離は次第に縮まっていく。

そしてもう十メートルも開いていないところまで接近したとき、数秒の間を置いて遂に作戦は始まった。

毅の「行くぞ！」という声と共に、懐中電灯が点灯し、相手の様相を照らし出す。

ターゲットの数は七。恰好からして明らか警備員ではない。

「なッ　！？」

全員が三人に振り向き、顔をこちらに曝す。

あれ？　これは年下じゃないか！？　という感想と共に、春輝は相手の予想外に幼い顔に驚く。

「とうりゃあ！」

雄叫びを上げ、毅が一番手前にいた少年に掴み掛かる。

しかしギリギリのところまで避けられ、逃げ出されてしまう。

「オイ、逃げるぞ！」

「逃がさん！」

発せられた声の主は、毅らの後ろに屈んでいた慶。

そして数瞬の後、慶の手に抱えられたバッグから、何かが勢い良く発射された。

ドシユ！　　ばっつー！

「が　っ！？」

高速で打ち出された何か　水を噴射しながら飛ぶペットボトル・

ロケット　は前方の誰かの後頭部にクリーンヒットしたらしく、

懐中電灯が照らす光の中で、誰かがもんどりうって倒れるのが見えた。

「ユウジ！」

七人組の一人が倒れた少年に近寄る。

そこへ毅が突っ込み、仲間へ手を差し伸べたところを拘束する。

それを狙い、「この野郎！」と一人がスパナを振り上げ、毅に襲い掛かる。

しかし、その腕が振り下ろされる前に、襲い掛かった本人がガラ空きの下腹部に慶の発射したペットボトルロケットの直撃を受け、膝をついてしまう。

その様子を見て取り、遂に一人が叫んだ。

「くそッ、一体何なんだよ、お前ら！」

「寧ろお前らは何なんだ？ 停電騒ぎまで起こして」

「何イツ!?」

「俺たちは、騒ぎを起こしたお前らを捕まえる。言わば正義の味方だ」

「勝手なことを！ こんなこととして何が正義だ！ ふざけんな！」

憤った少年は、自分たちが停電を引き起こしたことを否定することも忘れて怒鳴り散らす。

「まあ、正義かどうかは置いておいて」「とここで話を聞いていた春輝が会話に介入する。「君らがこの騒ぎの元なんだよね？」

あくまで冷静に聞いてくる春輝に、少年は激昂する。

「そつだよ！ だからなんなんだ！」

そんなにあっさり認められると……と春輝は心の中で苦笑する。まあ、その方がやりやすいんだけど。

そして、携帯を片手に言った。「伏兵部隊、前へ！」

春輝の言葉に一旦は「伏兵？」と意味が分からず首を傾げた少年たちだったが、自分たちの後ろから足音が聞こえると意味を悟り、顔を青くして振り返った。

「どーもどーも。春兄がお世話になっております。現在進行形で」
彼らの後ろには、宗介たち残してきた三人と、さっきまで春輝たちを追い掛けていたのとは違う警備員が立っていた。

宗介ら三人はいずれも、木刀を装備している。

「き、きたねーぞ！」少年は気迫を削がれるが、必死に叫び、とうとう逃げようと足を動かした。向かうは、誰もいない右か、左方向。

……だが、もう遅かった。最早逃げるという選択肢は少年たちには残されていなかったのだ。

騒ぎを聞きつけてやってきたと思わしき警備員が少年たちの四方八方から次々と現れ、少年たちは瞬く間に完全に包囲される。

包囲網はどんどん狭まり、たくさんの光に照らされ、次第に叫ぶ

気力も逃げ出す気力もなくなった少年たちは、光の中がっくりと膝をついた。

.....

今春輝たちは、デパートから感謝状の表彰式に出席させられていた。無論即席のものだが、次の日から学校のある彼らに『後日来てください』など言えないから致し方ないことだった。

電気は復活し、春輝たちは某警備員の人に誤解していたことを謝罪され、賊は賊で持ち物や犯行を認める供述から犯人と断定、お縄になった。

今は壇上で感謝の言葉をデパートの支配人らしき人が述べているところだった。

「えー、それでは、犯人たちを捕まえてくれた、勇気ある少年少女に、感謝状を送ります」

デパートの支配人らしき壇上の人が話を切りそう言うと、係の人に促され、春輝たちは前に一步出た。

実際僕らがやったことと言えば、ちょっとした喧嘩と走ったことだけだけどね。春輝は苦笑した。

そして、マイクの前の口が開かれる。

「杉澤慶一君」

すぎさわけいいち。彼と春輝は中学一年の頃からの付き合いだ。

慶一の性格は陽気でやや面倒くさがりといった感じで、チマチマしたことは嫌いだが、好きなことはとことんやるタイプ。

特に化学系と物理系が大得意で、他の教科のテストじゃ赤点ギリギリなのに、その二つだけはほぼ満点を取ってしまうくらいなのだ。

また慶一の人物像を語る上で欠かせないのは、常に持ち歩いている大きめの手提げ鞆だ。懐中電灯や水筒、折りたたみ傘などの生活用品と、先程も活躍した、慶一の物理学を応用して開発された水噴

射ペットボトルロケット・ランチャーを始めとした様々な兵器が搭載されている。

何でも恐ろしいことに、最近はバズーカ砲を作ろうとしているらしい。そのため、今回の買い物では工具類を中心に購入していた。通り名は“ミスター・ペットボトル”、“喧嘩屋の武器博士”。

「藤堂宗介君」

とつどうそうすけ。彼は、旧喧嘩屋とは今からほぼちょうど二年前からの付き合いだ。

宗介は藤堂家の分家の長男であり、厳格な家庭環境で育った。二年前のある事件で互いに知り合ってから、友達として春輝たちとほぼ行動を共にしている。

剣道を家で長らくやっていたらしく、元剣道部の遙が言うには相当な実力なんだそうで、また眼鏡を掛けているものの、実際はそんなに視力が悪いわけじゃないらしい。

宗介の人物像は比較的眞面目で、しっかり者。

恐らく春輝らと知り合うきっかけとなる、ある出来事が起こる前はもつと眞面目だったと思われる、何でもかつては神童と呼ばれたほど頭が良かったらしい。本人曰く、今ではもう頭は大して働かないらしい。女子からの通称は“竹刀の貴公子”。

「萩野毅君」

はぎのつよし。彼は春輝ら兄妹と最も古い付き合いで、小学生の頃からの幼馴染だ。

性格は単純一直線で、躊躇いという言葉を知らない。根は正直で良い奴なので、とても付き合いやすい奴だ、と春輝は思う。躊躇いを知らないくせに場の空気を読む男で、ムードメーカー役でもある。

運動は得意で、勉強は苦手。こういうタイプの例に漏れず、とても身長が高い。通り名は“大馬鹿大将”。

「双城遙さん」

ふたしろはるか。春輝の一歳年下の妹にして、親族を全て亡くしてしまつた今では春輝の唯一の肉親。

性格は明るく、友達が多い。昔から春輝と共に毅とかの男子ともよく話していたためか、異性とも特に分け隔てなく付き合える。

兄がシスコン呼ばわりされているため比較的目立たないが、実は遙もかなりのお兄ちゃんっ子である。

身長は約160cmで、やや小柄。すばしっこく、体が小さいのもあつて混んでいる購買に特攻しては目当ての物を手に入れられる運動能力を持つ。

身長はやや低いがこれでも元剣道部で、下手するとそこらの男子よりも武器を用いた戦闘では強さは上。通称はるっち。

「双城春輝君」

ふたしろはるき。この物語の主人公その人だ。

毅や慶一など、おかしな人物の溢れる中にいるためか、とても地味な人物に見えるが実際はそれほど地味でもない。特に妹のことになると周りが見えずに突っ走ることもあり、それ故周りからシスコンの称号を得ている。が、本人は気にしていない。

性格は明るい方で、成績は順位的に見て、中の上くらい。

昔に親族を亡くしていて、今は他の仲間と共に全寮制の学校に入学し、寮で暮らしている。ルームメイトは毅、慶一、宗介の三人。

毅と慶一がいる部屋では、朝に毅が何度揺すつても起きないのと、たまにはあるが毅を起こすただけに慶一が例の水噴射式のペットボトルロケットを至近距離からぶちかますため、朝から拭き掃除しないといけなくなるのが大変だ。通称“シスコン”、通り名は“喧嘩屋の司令”。

「月見里菖蒲さん」

やまなしあやめ。通称あやつち。春輝より一歳年下で、遙の同じクラスの親友にしてルームメイト。

宗介程ではないものの、厳格な家庭で育つたらしく昔から剣道や合気道をやっていたようで、戦闘力は高い。

比較的家庭からの束縛の緩んだ中学生になるまでは、遙や春輝らと遊ぶために家を抜け出してはよく怒られていたのだとか。

因みに、本人は隠しているつもりのようなのだが、宗介に恋心を抱いている。無論バレバレである。とは言え控え目な性格故、あまり積極的にはなれない。

「この、勇気ある六人の彼らが弊デパートの安全を」

.....

表彰後もしばらくデパートの支配人的な人の話は続き、彼らが解放されたのは夕方だった。

毅が背伸びする。

「あーあつと。さて、帰るか」

「そうだね」

「良いことをした後は気持ちが良いな！」春輝の頷きを見て、毅は笑って言った。

「良いことと言うか、単に走り回っただけな気がしないでもないがな」と冷静に宗介。

「宗介たちはあまり走っていない気がするけど.....」

「私たちもメールきてから走ったんだよ」春輝の言葉に遙がムツとする。

「ところで」

「ん？」

「どうした？」

慶一が突然立ち止まった。

「時間」

「え？」

「今何時か、そして我らの寮の門限は何時か。これで分かるな？」
春輝たちの寮の門限は19時だ。そして今は夕日が見える。

これが意味するのは

「走らないと間に合わないのか！」

「走れみんなア！」

そして毅と慶一の叫んだその一言で、彼らの週末は終わりを告げた。

第一話プロローグ「停電騒動」(後書き)

これで第一話のプロローグ終了です。

プロローグのクセに無駄に長いですが、そこは気にしない方向で)

第一話「喧嘩屋」その一

朝が来た。

部屋の時計が六時半を指したとき、春輝の携帯のアラームが鳴り響いた。

「さて」

アラームが鳴り、数秒と経たずに春輝は起床し、別段眠い様子もなく目を開いた。

「……………？」

そして起きて最初に彼の視界に入ったのは、何やら工具を片手に作業をしている慶一の姿だった。

「おう、おはよう春輝」

慶一は春輝に気付くと、何も持っていない方の手を挙げて挨拶した。

「あー、うん、おはよう」春輝はまるでいつも通りの慶一に少々困惑しつつ、聞いてみた。「朝から何やってるの？」

「ああ」とニヤリと笑って慶一がいじっていた物を春輝に見せる。

「これだ」

「こ、これは」

それを見て、その場にあつた物が何かを悟り、春輝は呻いた。

「バズーカか！」

「ご名答」

また物騒な物を……。正直春輝にはこんな感想しか浮かばなかったが、とりあえず笑顔で相槌を打っておく。

「なるほど。……昨日デパートで工具買ったのはこのためだったんだね」

「そうそう」とニヤケ顔を崩さず慶一が頷く。「俺の努力と設計図とペットボトルの結晶だ」

かなりカオスな結晶になりそうだったが、敢えてそこには春輝は

ツッコミは入れなかった。

「とうとうもうすぐ完成でな、そのうち試し撃ちしてみたいんだよな」。嗚呼、ここまでの道のりは長かった……やったぜ俺、やるぜ俺、や」。

「あれ、そう言えば宗介は？」

放って置いたらいつまでも喋り続けそうな慶一を止めるため、閑話休題。

「ん？ どうせ外で竹刀でも振ってんじやないか？」

「ああ、そっか」

宗介は日々の鍛錬を欠かさない。毎日の朝練は宗介の日課だ。

竹刀を振るう姿が差し込む朝日に映え、美しいとのことで女子には評判だったりする。

春輝が顔を洗い終わると、間もなく壁の時計が六時四十五分を指した。慶一が気づき、口を開く。

「もうこんな時間か」

「毅を起こさないかね」

毅を起こすのは彼らの日課である。

決して自分からは目覚ましを付けることのない毅は、放って置いたら昼まで起きないだろう。

「毅ー、起きろー」

春輝が毅を揺さぶるが、毅が起きる気配はない。

「ここまではいつも通りだな」と慶一。「今日はどうする？」

普段より心なしか気合いの入っている慶一を見て、「うーん」と唸る春輝。下手をすれば朝から部屋が水浸しだ。

「週の始めの景気付けに、たまにはゼロ距離ロケットはどうだ」

案の定な慶一に対し春輝は苦笑する。

「拭き掃除が大変だよ」

「それもそうか。んじやどうしようか？」

「できればより簡単にね。時間もあまりないし」

と、ここで慶一の脳内に電流が走った。

「アレだ！ アレを使えばいい！」

「アレ？」と不穏な何かを感じ春輝が訝る。

「これこれ」とバッグから慶一が取り出した物は、中々鋭利なゴムナイフだった。

「なんでだ！」と思わずツツコミを入れるが、時間があまりないのを思い出し、「やっぱりそれでいいか」と掌を返した。

「オーケー、一思いに行くぜ」

慶一が気合いを溜め、息を吸い込む。

「くたばれ、萩野毅！」

物騒な掛け声と共に繰り出される攻撃は、寸分の狂いもなく毅の右脇腹中心へと向かっていく。

ドスツッ！

「ぐおっはあ！？」

鈍い刺突音の後に聞こえたのは、言うまでもなく、被害者の悲鳴だった。

「ぐ、ぐおおおおお……」

刺された痛みのためか、毅はしばらくの間悲鳴を上げながらベッドの上を猛スピードで転がり回り、そして壁に派手に全身を激突させてその動きを止めた。

「おい、生きてるか？ 萩野」と聞くのは悪びれた様子もない慶一である。

「生きてるか、だと……」

壁の方からくぐもった低い声が聞こえた。声の調子はわなわたと震えている。

「死ぬかと思っただわこのボ」

突然毅が身を起こし、慶一に襲いかかろうとしたが、その時毅の身を更なる不幸が襲った。

ガッ！

「……?!?!?!?」

毅のベッドは二段ベッドの下の階層であり、そこから突然に身を

起こし飛びかかりかけたわけであるから、毅が向かった先は一つだ。慶一の元ではない。勿論春輝の元でもない。

無論、ベッドの天井である。

「ぐああああ、がつ、ごっ、ぐああああ……」

物凄い勢いで天井に突っ込んだ毅は、頭を抱えて再びベッドの上を転がり始める。

その哀れな様子を見て、春輝たちは思わず呟いた。

「可哀想だ、この人……」

「一応身構えはしたが、まさか自滅するとはな……」
その後しばらく毅の悶絶は続いた。

……

春輝たちがその後食堂に着いたのは、普段から十分遅れの時間だった。

「遅いぞ」

春輝たちの姿を認めるなり、宗介が口を開いた。

「遅いぞー。もう時間ないぞー」

続いて宗介の斜向かいに座っていた遙も口を開く。

しかし、口では苦言していても、特に何も言わなかった菖蒲も含め、三人は食事を口にせず、春輝たちの到着を待ってくれていた。

春輝にはそれが地味に嬉しかった。

「待たせてごめんね。さ、早く食べよう」

春輝たちが食事を取って席に付くと、それぞれ自分の朝食を食べ始めた。

朝食の間、毅は頭にできたタンコブをさすっていた。

一方、慶一はその毅に朝食の一部を献上することで、朝の報復を免れていた。

……

無事校舎に遅刻することなく六人は辿り着き、授業は今、四校時目が終わろうとしている時だった。

教室の一番後ろから二番目、窓際から二番目の比較的隅の方に双城春輝の席はあった。

「寝てるし……」

春輝は思わず小声で呟いた。

春輝の一つ前の席に毅は着席しているのだが、その男は誰が見ても明らかに机に突っ伏していて、夢の世界へ旅立っていた。

「起こすか？」とこれは慶一の声。

春輝の右隣の席は慶一の席だ。春輝の呟きをキャッチしたらしい。「放って置け」とこれは宗介。

宗介は春輝の左隣の席に着席している。

「でも流石にもう四校時だしねえ……」

そう、この毅という男、今日の授業は一校時目から全て寝て過ごしていたのだ。度々不真面目な夜更かし生徒が試みる暴挙である。

「ま、もうすぐ授業も終わるしほったらかしでもいいか」

「そうだね。まあ担任の先生の授業だし、後で毅怒られそうだけど」「こいつは一度くらいは本気で怒られないと分からないだろう」

三人が話しているうち、授業時間は刻々と過ぎていく。その間も毅が起きる気配はなかった。

授業時間の終了まで残り三分となったとき、教壇に立つ担任の教師が授業を終え、別の話を始めた。

「あー、昼休み前にいいお話だ」

何だ？ 飯でも奢ってくれるのか？ と昼休みを前にした生徒たちがざわめく。

「もう知ってる人もいると思うが、何やら我がクラスの勇者たちが人々を救ったらしいぞ」

教師の言葉に、生徒の殆どが振り返って春輝たちの方を見た。

「げ」「うひょ」「……………」「すぴー、すぴー」

このクラスにおいて、いやこの学院において、『勇者たち』『喧嘩屋』『武装集団』と言えば、春輝たち六人を指す言葉に他ならないのだ。基本的に呼ばれるのは『喧嘩屋』だが、教師の立場上“喧嘩”という言葉は使い辛く、教師たちからは『勇者たち』の方で呼ばれることが多い。

またお前らか！ 今度は何やったんだ？ とざわめきの声が大きくなる。

そのざわめく様子を見て教師が口を開く。

「何でもな、今回はデパートで騒ぎを起こした犯人を捕まえたらしい」

おお！ すげえ！ 流石喧嘩屋！ と称賛の声が上がる中、「いやまあ」と春輝が照れる。

「ただ、残念なことに……」と教師が言い、勿体ぶって口を開いた。「英雄の内約一名は今夢の国を救いに行っているようだがな！ 萩野！」

教師が教卓に手を打ち付けて吼える。しかし毅に起きる気配は未だない。

教室は笑い声で盛り上がり、教壇に立つ教師の腕は筋肉が盛り上がった。

………

「ふいー、酷い目に遭ったぜ」

と言いつつ毅が職員室から出てきたのは昼休みが始まってから既に十分も経過した後だった。

「毅が授業中寝てるからでしょ」

「まあな」

教師にこっぴどく叱られた毅を迎えるは春輝たち五人だ。

「ま、それにしてもよ」と毅。「俺らも有名になったな」

「有名と言ってもお前のせいで評判は下がっている気がするがな」

とこれは宗介。

「まあ、居眠り常習犯だしねえ」と遙。「教師間のブラックリストに載っているのは有名な話」

「おいおい、マジかよ」毅が聞いて弱った顔をする。「てかその前に腹減ったわ」

「じゃ、萩野も来たことだし、昼飯食うか!」

何気なく歩きながら慶一が言うと、突然大声が彼の鼓膜を襲った。

「あああーっ!!」

大声の主は遙だ。

「うるさ」

「忘れてた!」

耳元で大声を出された慶一の抗議を無視し、遙は続ける。

「今日は新発売のパンが出る日だ!」

「パン?」

「あ、そう言えばそんな話を聞いたような……」

首を傾げる春輝たちと頷く菖蒲。

「パンって、どんなパンなんだ? 遙」

「イチゴ入りチョコメロンパン」

また訳の分からない商品を……。春輝たちは全員同様の感想を抱いたが、一応どんなものか興味が沸いたため、敢えて何も言わなかった。

「と、こんなところで喋っている暇はない! 行くぞ、あやっち!」

「うん!」

「余っていたら春兄たちの分も買ってくる!」

言うなり女子二名は走り出す。春輝たちが見送る中、教師に見つかって、廊下を走っていたことを注意されていた。

再び走り出すときは、二人は何か話をしながらだった。

宗介が絡んでないときは、あやっちも普通に喋るんだよね……。

春輝は心で苦笑いした。恋は曲者とは言ったものだ。宗介が話に加

わっているだけで拳動不審になるもんなあ。あとラップ口調。

「なあ、普通もう売り切れてるんじゃないか？」

毅が言った。春輝も頷き応じる。

「そうだろうねー。新発売なら人気だろうし」

「しかしな」とここで口を開くのは宗介だ。「今はパンにイチゴだのチョコだのメロンだのを一度に入れるものなのか？ 果たして名前がややこしくて分かりにくいと思うのだが」

その疑問には、春輝も多めに同意したい。

「まあ、チョコなしでも『イチゴ入りメロンパン』は今までに見たことあるけど、確かにアレは正体不明だったな」と慶一も頷く。

変わりゆくパンの姿に、残された男四人はただただギャップに苛まれるばかりだった。

.....

その頃、購買は人、主にパン目当ての女子で埋め尽くされていた。混み過ぎていて、販売もままならずまだ売れ切れてはいないらしい。

「どうする？ はるっち」

菖蒲が心配そうに聞く。例え自分たちが小柄でも、満員電車を彷彿とさせる購買の中に突入することは難しいだろう。

しかし、菖蒲の心配とは反対に遙は自信に溢れていた。

菖蒲の腕を掴み、遙は目を閉じぶつぶつと呟く。

「今の私の運動能力は.....」

「.....?」

「繁殖期のトノサマバツタに匹敵するッ！」

不意に目を見開きひとしきり叫ぶと、遙は人混みに突撃した。

「え、待ってはるっち.....わわっ!？」

菖蒲の腕を引いたまま。

.....

春輝たちが歩きながら購買の前まで来たとき、購買から二つの影が飛び出してきた。

「なんだなんだ？」

よく見ると、その影は遙と菖蒲だった。二人の手には、パンと思わしきビニール袋がいくつか握られている。

「お、買ったのか」と声を掛け、端と気付く。「……………なんか、あやうち死にかけてないか」

春輝の言う通り、菖蒲は肩で息をしているほどに疲弊していた。

一体、購買の中ではどんな死闘が繰り広げられていたんだ？

春輝は恐怖に慄いた。

「いえ……………問題ありません……………」

「ならいいんだが……………」

まさに死にかけな菖蒲に対し、気の毒そうに春輝は返した。

「さて」傍らに立っていた遙が口を開いた。「パンが足りない」

「足りないって、売り切れか？」

慶一の問いに遙は頷く。「四個しかない」

「つまり」とこれは毅。「二人は食えないわけか。できれば食ってみたいが」

しかし遙の返事はつれない。

「元から毅のは買ってない」

「あっそう」

「ところで、遙は死にかけじゃないんだな」

春輝が言った。遙がニヤリとして頷く。

「これがトノサマバツタの力よ」

……………

「あー、さて、誰が食わないかということだが」

慶一が徐に口を開いた。先程のトノサマバツタ宣言からしばらく、

意味を理解しかねた集団は沈黙していたのだ。

「俺は本当に食えないのか？」と毅。

「食えないとかの前に買ってない」と遥。

「なんで俺だけ……」

不服そうな毅だったが、パンぐらいで突っかかるのも大人気ないか、と思いきそれで降はあまり言及しなかった。

毅は候補から抜けたため、後一人が食べられないことになる。

と、ここで宗介が申し出た。

「俺は別に食べられなくてもいい」

実際のところは、宗介は得体の知れぬ物をできるだけ口にしたいし、なかつただけであった。

「俺が食べないことにし、他のみんなで食べればいい」

「カツコいいねえ、宗介」

「決まりだな」

春輝と慶一が言つて、さあ食べるかとなったとき、菖蒲が口を開いた。

「いや、あ、あ、あの、私が食べませんので、そ、宗介さんは、ぜひ是非食べてください……」

驚いてみんなが菖蒲を見る。

瞬間、菖蒲の顔が沸騰する。まさにイチゴのような赤さだった。

「ありがたい申し出だが、しかし、買ってきた本人が食べないというのは……」と宗介も驚きつつ対応する。

「わ、私は別に、いいので……」

菖蒲の声はじきに小さくなる。それを見て取り、遥が助け舟を出した。

「ほらほら宗介さんも、あやっちがこう言ってるんだから」

「ム……し、しかし……」

尚も逡巡する宗介を見て、今度は春輝が口を開いた。

「なら僕が食べないというのものもあるけ」

「貴様は実の妹がせっかく買ってきた飯を他人に渡すと言うのか」

しかし最後まで言えず遙に睨まれてしまう。

「う、ごめん」

「あー」慶一が間延びした声を出す。「これは俺が食わなければ丸く収まりそうだな」

「イエス！」慶一の言葉に反応し、遙が人差し指を向ける。「その通り！」

「ひょっとしたら、お前も最初から候補外だったんじゃないか？」と毅。

「何だかお前にそれを言われると、激しく苛立ちを覚えるな」と慶一。

そして、結局毅と慶一が食べないことになり、他の四人が食べることになった。

食べてみると、中々名前ほどカオスでもなく美味しいな、と春輝がパンの感想を言おうと、口の中身を飲み込もうとした。

しかし、ここで事件が起こった。

「喧嘩屋ア！」と叫びながら、男子生徒数名が猛スピードで駆けてきたのだ。しかも、内数名は顔に痣を作っていた。

「ゴホッ!？」

今まさに物を飲み込もうとしていた春輝は、その光景に驚き激しくむせてしまう。

ただならぬその光景に、購買付近の生徒からなんだなんだと声がかかる。

「何があった？」と、とりあえずむせる心配のない毅が代表して男子生徒たちに聞いた。

「校舎に、近くの高校の不良が来たんだ！」

「しかも、お前ら喧嘩屋を呼んでる！」

口々に男子たちが答える。

それを聞いて、毅が首を傾げる。

「俺たちを？ なんてだ？」

「分からない。でも、『落とし前付けさせて貰う』とか言ってた！」

落とし前……！？　な、なんてバイオレンスな言葉なんだ。そんなの怖いお兄さんたちの言葉じゃないか！　むせ状態から復帰した春輝が耳を疑う。

「あー」と春輝の心配に気付かず毅がのんびりした口調で言った。

「昨日のことかなー」

昨日デパートで春輝たちに捕まえられた少年たちが春輝の脳内に映し出される。その不良とは彼らの仲間なのだろうか。

「して、賊の人数は？」素早くパンを食べ終えた宗介が聞く。

「ああ、五人ほどだったよ」

「じゃあ　」と今度は遥が口を開く。「その生々しい傷は？」

「……………」

遥が聞くと、男子たちは黙ってしまった。

「……………」そいつらにやられたんだね」

春輝が代わりに答えると、聞かれた男子は苦笑した。

「まあ、ね。なんかいきなり喧嘩屋のこと聞いてきたから知らないってシラ切ったら、すぐにバテて殴られたよ」

「明らかマトモじゃない奴らだったからさ」別の男子が引き継ぐ。

「お前らが何かされるのかと思ってな」

「良い奴だな、お前ら……………」

毅が感動する。

「まあ、止められなくてやられちゃったがな」そう言いながら苦笑いする男子は頬に赤い筋　血が付いていた。

この男子たちは喧嘩屋メンバーと知り合いなわけではない。

単に、同じ屋根のしたに暮らす喧嘩屋メンバーたちに火の粉が降りかかるのを防ごうとして、彼らは傷を負ったのだ。

その事実が、喧嘩屋メンバーたちの闘志に火を付けた。

「喧嘩だ喧嘩ア！」「許すまじ！」「仇は討つ」「バズーカはまだ

未完成だが、奴らは討つ！」

喧嘩屋メンバーが口それぞれに闘志の炎を覗かせる。因みに、声は毅、遥、宗介、慶一の順である。

「行こうみんな！」

発せられた春輝の掛け声と共に、喧嘩屋メンバーたちは勢いよく走り出した。

第一話「喧嘩屋」その一（後書き）

（今回の名言）

遙「今の私の運動能力は……繁殖期のトノサマバッタに匹敵するッ
！」

展開が速過ぎた感がなくもないですね。
バトルは次回の更新に持ち越しです。

11/18 誤字があったので修正。

第一話「喧嘩屋」その二（前書き）

前回投稿直後風邪で熱を出し、治ったと思えば定期考査。
定期考査後は再び風邪がぶり返し更に身近で問題発生。

結果こんな遅い更新になりました。前回見てくださった方申し訳ないです。

第一話「喧嘩屋」その二

春輝たちが校舎を飛び出すと、校門付近に、彼らはいた。

リーダーらしき背の高い男を先頭に、太った男と禿頭の男が両脇に、さらにその後ろに二人男が控えている。

先頭の男はいかにもといった感じの風体で、まるで一昔前の不良ドラマにでも出ていそうな恰好である。

彼らは春輝たちに気付くと、ニヤニヤしながら近付いてきた。

「やあやあ、お待ちしておりました」

春輝たちが近づくと、彼ら 五人組の先頭の男が一步前に出て、恰好に似つかわしくない、丁寧な言葉遣いで話し始めた。

しかしその言葉遣いとは裏腹に、男たちの目は春輝たちを見下す風をしている。

その慇懃無礼な態度が、学友の仇に燃える春輝たちの神経を逆撫でした。

全員の眉が一ミリほど細くなった。

「俺たちに、一体何の用だ」

毅が怒りのためか、大きな声を出す。

「おやおや、そんな恐い顔をなさらないでくださいよ」

熱くなっている毅とは対照的に相手はあくまで冷静で、ニヤけ顔を崩さない。台詞と共に側近の二人も低く笑った。

粘着質の声を出す先頭の男は、長髪で鼻は大きく、耳は小さい。

その耳には銀のピアスが二つ付いている。

「時間もないので、要件のみをお伝えしますね」

時間がないとは言いながらも相手はそこで言葉を切り、一度春輝たちの顔を見回す。

いちいち自分たちを見る目が嫌な光を帯びているのに、春輝は、いや春輝たち全員が苛立った。

そして、自分に全ての視線が集まっていることを確認してから、

再び男は口を開いた。

「明日の夕方五時まで、仲間の治療代感謝料合わせて七十万、用意して頂きたいわけでしてねエ」

……………。

一瞬、沈黙の時間が過ぎる。

「おい、何言ってるんだ、こいつ?」

毅が後ろを向いて小声で春輝に訊ねる。

「いや、僕にも分からないよ……………」

治療代に感謝料? 何でそんなものを僕らが払わなきゃいけないんだ?

そもそも、こっちの生徒に怪我を負わせたのはこいつらじゃないか。

「意味が分かんねーよ」と慶一。

「何で僕らがそんなもの払わないといけないのか、説明」

「何でって……………」相手が春輝の声を遮り口を開く。「ただあなた方がやったことの、責任を取ってもらっただけですよ。……………まさかもう忘れた、なアんてことはないですよねエ? 昨日のこと」

「責任だあ?」と毅。「俺たちは昨日だって別に誰にも怪我はさせてねーし、金を払わなきゃいけない謂われはないぜ」

「いえいえ、あなた方はそのつもりだったのかもしれませんが、実際あの子たちは怪我してたんですよエ」

医者 of 診断書もここにありますが、と相手は懐から何かが書かれた紙を何枚か取り出し、ヒラヒラと振ってみせた。

そんな紙切れがなんだって言うんだ。春輝は呆れた。眉唾物にも程がある。

「じゃあ」と春輝が声を上げる。

「はい?」

「感謝料ってなんなんですか?」

百歩、いや一億歩くらい譲って、まだ治療費は分かる。しかし感謝料というのは流石に納得できる部分が春輝には見つからなかった。

「それはですねエ、あなた方が犯人だと思っただけで捕まえた彼らは実は冤罪だったんですよ」

「嘘つけ」と遥。それには春輝も大いに同意したい。

「嘘じゃありませんよ。……そして、冤罪の原因を作ったのは他でもない、あなた方ですよねエ？」

無茶苦茶だ、と春輝は思った。昨日の子たちだっただけで容疑を認めてたじゃないか。

「だから俺たちに金を払えと？」馬鹿にしたような口調で慶一が言った。

「そうです」

相手がこれで話は終わり、と言わんばかりに満足げな表情になる。「では、明日の夕方五時に郊外にある空き地で待っていますよ。今日はもう時間がないので失礼させて頂きますねエ」

さて、と取り巻きを引き連れ帰ろうとする相手に、毅が慌てて声を掛けた。

「おい、待て待て待て」

「まだ何か？」

面倒そうに相手が振り向く。

「金は払わねーぞ？」

毅がそう言った瞬間

「ああ？ 今何だった？ てめー」

彼は突然乱暴な口調になり、毅を睨みつける。声のオクターブが跳ね上がった。

「金は払わないと言ったんだよ」

「ほーっ」

毅がやや驚きつつも繰り返してやると、相手はまた元のニヤケ面に戻った。態度もさつきまでと同じ、慇懃無礼なそれだ。

「まア……払わないのならこちらにも考えがありますけどねエ」

「考えだと？」

相手の挑発するような言葉。春輝は余裕綽々な相手の口調に嫌な

予感をよぎらせる。ひょっとしてとんでもないことを考えてるんじゃないか……？

「さつきですね」と相手が続ける。「ついついカツとなって何人かを皆でボコってしまったんですが」

「何が言いたい!？」

「いやア……金、あなた方に払って貰えなかったら、私たちもイライラが募ってしょうがなくなりそうできてねエ……」ここで一旦切り、続けた。「ついついこの辺にいる生徒さんをボコボコにしちゃうかもしれないませんヨ。それも毎日ね……」

「なに……!？」

思わず相手の言葉に毅が、みんなが言葉を失う。

相手が言わんとしていること。それはつまり、金を払わなければここの生徒に毎日暴行を加える、ということ。

言ってしまうえば、これは脅しだ。

相手の総戦力は分からないが、こんな脅しを掛けてくる以上、かなり大きな不良グループなのかもしれない。

相手の脅しがハツタリだと断定できない以上、春輝たちは人質を取られたのとほぼ同義ということになる。

春輝たちも、自分たちのために学校の皆が犠牲になるようなことはできない。

「てめえら……!」

毅が悔しそうに声を上げる。

「何ですか？」

その毅の様子を見て、勝ち誇ったかのような態度になる相手。

こいつらは酷い悪党、いや小悪党だ。

「くッ……!」

「鬼め……ッ」

毅が怒りで歯噛みすると同時に、慶一が思わず非難の言葉を発する。

「鬼イ?」しかし非難の言葉を受けた相手は寧ろ楽しそうに口を開

く。「それはあなた方でしょ？」

「なに……？」

「私たちの仲間に怪我させた上、停電騒ぎの犯人に仕立て上げ、拳げ句の果てに治療代も払わず知らない振り。鬼畜とはまさにあなた方のことを表す言葉ですよねエ」

「なんだとこの野郎！」「ぶつ殺すぞこの野郎！」

毅と慶一が怒りの声を上げる。春輝や遙、宗介、菖蒲も怒りで顔を歪ませる。

「おおつと、今は交渉の時間ですよ？ 暴力はやめてくださいな、野蛮人さま方」

だが相手は春輝たちの刺すような視線を難なくいなし、告げた。

「では、また明日夕方五時、郊外にある空き地で会いましょう。…

…七十万、現金でお忘れのないようにネ」

……………

「クソツ！ 一体どうすりゃあいいんだ!？」

放課後、春輝たちは寮の一部屋に集まっていた。

毅が枕を力一杯壁に投げつける。

「物に八つ当たりするのはよせ」

暴れる毅を見て宗介が静かに言った。

「だけだよお……」

「朝の復讐をするのはよせ」

暴れる毅を見て慶一が静かに言った。

「朝のはおめーがやったんだろ」

毅が慶一を睨む。

「しっかし、どうしたもんかねえー」

慶一がマイペースにごそごそと手を動かしながら言った。

「で」毅が慶一の方を見てしかめっ面を作る。「お前はこんなときに何やってんだ？」

「バズーカの製作」

「ああ、そうかい」

「おい萩野、バカにするような目で俺を見るな」

慶一がムスツとする。

「あいつらとの決戦用に完成させといた方がいいだろ？」

しかし、慶一本人以外はきよとんと目を見開く。

「え、慶……」 皆を代表して、今まで瞑想をしていた春輝が問い掛ける。「まさかあいつらと喧嘩する気？」

「ん？ しないのか？」と慶一は逆に不思議そうに春輝たちを見る。

「いや、だつてさ……」と春輝。「相手の兵力が未知数だし、もし負けちゃったら学校の他の皆が」

「だが、七十万なんて金を集めることは無理だろう？」と慶一。

「ま、そりゃそうだが」

「ならやるべきことは一つだろ？」

「しかしな……」と尚も渋る毅に、今度は宗介が口を開いた。

「なんだ、お前らしくないじゃないか、萩野」

宗介は腕組みをして口の端を釣り上げる。

「いつものお前なら何も考えずにブチのめしにいくところじゃないか」

「いや、らしくないのはお前だろ」と毅。「いつからそんなにやる

気満々になってんだ？」

「俺は」と毅を無視して宗介が手を挙げた。「貴奴らと一戦交えるのに賛成だ」

えええええ！？ 春輝は驚愕する。い、いつもの冷静な宗介はどこにいったんだ……。

「世の中には一度ぶちのめされないと分からない奴もいるんだ、そういう奴らは半殺しにするに限る」

「いつもの宗介じゃない……」

春輝が呻く。このままでは話が危険な方向に進んでしまう。

「ぶっ、心配はいらなかつたようだな」と毅。

「殺？」

「我々喧嘩屋は断固として賊どもに屈しないことをここに明言する！」

「ここで明言してどうすんの」

「殺まで……」

「双城、どのみち俺らにあんな大金は払えねえ。だつたらやるしかないじゃないか」と慶一。

「……」

でも と春輝の胸にはまだ不安があった。もし相手が何十人という大勢で来られたら……。

「大丈夫だ」

「え？」

「ざつと三十人くらいまでなら相手できる」

慶一の兵器は余程大規模な被害をもたらすらしい。

「でも……」

しかし春輝はまだ逡巡していた。

そうだ、ならまだ喋ってないあやっちの意見を聞いてみよう。宗介がいるこの場ならあやっちは控え目なことしか言わないはず。これでみんなをなんとか考え直させないと……。

「じゃあ、あやっちは？ あやっちはどうすべきだと思う？」

「やっちゃんおうよ」

即答された。

「決まったな、春輝。明日は戦争だぜ」

「仕方がない、分かったよ……」

「では、これより作戦会議だ。頼むぞ春輝司令」

夕方から始まった作戦会議は、結局深夜まで続き、終わった後、女子二人は部屋に戻らず、全員その部屋で眠りについた。

……

「一三、作戦開始だ」

慶一が一人で呟いた。

慶一は一人寮から抜け出し、開戦準備に務めることになっていた。当然のように授業はサボっているが、春輝たちの計らいにより学校側には風邪をひいて休養中と伝えられている。

午前中は兵器の増産を、午後は設置作業を行うことになっている。

「只今目的地に到着、ファーストフェイズ、哨戒任務を開始」

『了解』

呟きながら作戦状況を逐一携帯でメールを介し春輝に連絡する。

春輝からはすぐにメールの返信が来る。授業は毅と宗介が板書を引き受け、春輝は慶一との連絡役をやっている。

敵から指定されている金の引き渡しポイントに着いた慶一は敵がないか、物陰に隠れて空き地の様子を窺う。

「作戦エリア内に敵の存在しないことを確認」

『了解、セカンドフェイズに移行せよ』

十分ほど様々な角度から空き地内を見回し、敵がいなかったことを確認した慶一は指示通り、任務を開始する。

「双城司令の作戦の元、設置作業を開始する」

……………

そして遂に、運命の時はやってきた。

午後五時。金の受け渡しの時刻だ。

「やあやあ、時間通りに来て頂けてこちらも助かりますよ」

春輝たちが待っていると例の男たちが来て、空き地に既に到着していた六人を見るなり、昨日と同じ口調で、上機嫌な様子で話し始めた。

「さて、約束の七十万、ご用意頂けましたか？」

「……………一束十万だ」

相手に慶一が七つの封筒を差し出す。封筒はそれぞれ少し厚みが

あった。

「では中身を改めさせてもらいますね」

相手が封筒の一つを開け、中を覗きこむ。

「ほー、キチンと金が入っているようですね」

全ての封筒を開けた相手は感心した様子で言った。

「ちゃんと七十万用意して頂けたようで」

「そう言えばさあー」

しかし言葉に慶一が割り込んだ。

怪訝そうな顔をして相手が慶一を見る。

「昨日、こいつ確かに『金は払わねーぞ』って言ってなかったかな

ー」 毅を指差す慶一。

「は？」

ますます怪訝そうな顔をした相手はもう一度封筒の中を覗きこんだ。

「開けてから約十秒」

パパパパパパパン！

「液体火薬だバーン！」

突然封筒から発せられた大きな連続した音と同時に、男たちの持っていた封筒は全て炸裂した。

驚いた男たちは、いずれも後ろに尻餅をついてしまう。

「な……なんだ、今のは……」

「タネも仕掛けもある手品だよ」完全に腰を抜かしている男たちに慶一が言う。「液体火薬ってやつさ」

「……上等じゃねーか」

しかし、もといだ。リーダー格の男だけは腰を抜かしていなかった。

「一体これがどういうことか、説明してもらおうか」

「説明も何も」と春輝。「僕たちはあなた方にお金は一円たりとも

「払いません」

「何？」

もう後には引けない。春輝は毅然とした態度で言った。

「今日はあなた方をぶっ潰しに来たんです」

それを聞いて相手は吹きだした。既に立ちあがっている取り巻きからも笑い声が出る。

「おい、お前ら聞いたか？ こいつ、俺らをぶっ潰すだってよ？
ちゃんちゃらおかしいよな？」

後ろを振り向いて男が言うと、取り巻きからおおよそ同意と取れる声が聞こえた。

そして春輝たちに男が向き直った時、その顔に笑みはなかった。

「オイ、てめーらオレらをナメンのもそこらにしとけよ」と凄みのある声。

「これ以上へタに逆らうようなら、ちょっと痛い目見てもらうことになるぞ」

「ちょっと、か。そりゃありがてえ」と毅。

「いいやちょっとじゃねえ、生まれてきたこと後悔させてやるくらいだ」

「例えがガキじゃねーか」と今度は慶一。「てか逆らう気マンマンだしな」

「ほう」と再びニヤつく男。「金払わないならどうなるか、分かってんだろーな？」

分かってている。春輝は再び腹をくくった。

ここで春輝たちが負けること、それは即ち学友を危険な目に遭わせることになるということだ。

「……分かってている」春輝が答える。「さっきも言った通り、今日はあなた方をぶっ潰しに来たんです」

「言い忘れたがよ」男が応える。因みに既に男の眉は怒りで震えている。「俺が一本電話すれば、仲間が大勢来るんだぜ？ それでもやるのか？」

背後から襲った。

「もらったあつ！」

目の前の男の怯んだところへ、真っ先に飛びかかっているのは毅だ。

一番春輝たちの近くにいた男に毅のストレートが決まり、男は倒れる。

「コンの……！」

「させるかよ！」

一人を殴り倒した毅に、一人の男が襲いかかると、慶一の声が響き、

ドシュー！

「……！」

慶一の肩、そこには鉄の筒が構えられており、そこから発射されたペットボトルが男の顎を直撃した。

「ナメるな！」

さらにもう一人が、今度は慶一に襲いかかった。

「三連射までは可能なんだよオ！」

しかし慶一の声と共にゼロ距離射撃が男を襲い、男は一発で気絶してしまう。

「後ろ！」

春輝の声に反応し、隊列の後ろにいた宗介、遙、菖蒲が動いた。

三人は先程のロケット発射時に、既に四人を昏倒させていた。

「鉄パイプ持ちは俺に任せろ」

宗介が静かに言い、木刀を正眼に構え鉄パイプを持った男と対峙する。

女子二人も剣を構え、戦闘に入る。

「木刀なんてよオ！」

鉄パイプ持ちは宗介目掛け思いつき武器を振るう。

周りの男たちも宗介に襲いかかるが、宗介に攻撃は一切当たらず、逆に隙を切り払われる。

乱戦になってから宗介が一人を昏倒させた時、慶一の声がまた響いた。

「第二弾いくぜ！」

ドンドンドンドン。

慶一の声と同時に、空き地の隅に立っている木々の茂みから何かが発射された。

それらは男たちのリーダー付近にまっすぐ飛び、途中の空中で炸裂した。

パパパパパン！

発射されたのは市販の打ち上げ花火の弾。破裂した砲弾は大量の光弾を撒き散らし、夕日が木々で遮られ、薄暗い周囲を照らす。

熱を持った光弾は何人かの男に命中し、軽い火傷を負わせ、怯ませる。

更に、その光景を見て思わず動きを止めた包囲部隊の男たちはその隙を襲われまた一人、二人と倒されてゆく。

「ナメんなよこのクソアマがア！」

と、その時一人の無傷だった大男が近くにいた菖蒲に殴りかかった。

恐らく女子相手ならば確実に勝てると思ったのだろう。

しかし、その男の見解は甘かった。

「……ふっ」

「がッ？」

華麗なバックステップによる回避から気合一閃、菖蒲の当て身を胸に食らい、一撃で男は崩れ落ちる。

その後ろからもう一人男が殴りかかるが、これは傍にいた遙の木刀に脳天をカチ割られた。何とか起き上がって反撃しようとするが、そこに春輝が跳び蹴りで突っ込んでノックダウン。

「あと包囲網は十人か」とそれを見て慶一。「てか、相変わらずのシスコンだな双城」

「ピンチでもないのに突撃するからな」と毅。「何という妹ラヴ」
「それは置いといて、そろそろ第三弾だな」

そう言うと、慶一はポケットから何か小さな袋をいくつか取り出し、男たちが固まっているところ　男たちのリーダー付近　に投げつけた。

「それ、何だっけ？」と毅。

「小型グレネードだ」と慶一。

ドドドドドドーン！

袋は地面に着くと、大きな音を伴って小規模の爆発を起こした。

火傷などの被害を受けた者こそいなかったものの、男たちは完全に戦意を喪失した。

それとほぼ同時に、空き地で行われた戦闘が終結した。

.....

死屍累々、とまでは行かなかったが、空き地には十人ほどの気絶した男たちが横たわり、気絶こそしていないものの動けない男たちが数人、後は腰を抜かし立っていないでいる者たち。

「オイ」と毅。「さっきまでの威勢はどうしたんだ？　リーダーさんよ」

当のリーダーは二度の爆撃に遭い、完全に戦意を喪失していた。戦闘前のニヤけ顔はもう微塵も残っていない。その顔は恐怖で歪んでいる。

「す……すすすみませんでしたあ！」とリーダー土下座。

無様な男を見降ろし、春輝は言った。

「お金、払わなくてもいいですよね？」

「もももちろんです！」と男。「一切、一切お支払い頂かず結構です！」

「じゃあ、脅しの件は……」

「しません！ もう金輪際関わりません！」

ふう、と一息つく春輝。実際この男、主人公のクセに今回の戦闘における活躍がかなり少ないのだが、一番頭を悩ませていたということ、気疲れしていたらしい。

「あ、そうだ」

「はい、なんででしょうか!？」

「今の戦闘、ビデオが何かに撮ってないですよね？」

「撮ってません！ いや、戦闘になると直前まで思ってたなかったんで！」

よし。これで万事解決、かな？ 喧嘩屋メンバーが顔を見合わせる。

「もし今言ったことどれか一つでも嘘だったら……、どうなるか分かってるよな？」と毅。その顔は悪役の如く半笑い状態だ。

「わわわわかってます!！」

「んじゃ帰ってもよし」

……

毅が言った後、男は何か動ける者だけ引き連れて帰っていった。空き地には、未だ目覚めぬ男たちと春輝たちが残った。

「俺らも帰るか」

「そうだね」

春輝たちは空き地を出、寮へ歩き始めた。

「それにしても」と宗介。

「ん？」

「杉澤の兵器は今更ながらトンでもないな」

今日出てきただけでもまず液体火薬、バズーカ、設置タイプの口ケツトランチャー、花火砲台、小型グレネード……。今更ながら、春輝もあの兵器群はトンでもないな、と思った。

「まったくだ」と毅。

「てかさあ、春兄」

「ん？」

「あまり活躍してなくね？」

「なんだと！」

「仕方ないだろ」と慶一。「双城の役割は司令だからな」

「印象に残ってるのが跳び蹴りしかない」と宗介。

「あれなんでやったの？」と遥。「別に私、大丈夫だったけど」

「シスコンだからだろ」と今度は毅。

「まあね」

「ちょ……」

簡単にシスコンであることを認める春輝に、遥が赤面する。

「はるつちが赤くなってる」と菖蒲。

それを聞いて「うわあ」と慶一。

「なんなのさ、うわあ、って」

「なんという見ている方が恥ずかしい兄妹」

「俺も昔から見ているが、すごい兄妹だよな」

「いいでしょ、別に」

春輝がそう返した瞬間、遥がダツと走り出した。恥ずかしさに耐えきれなかったらしい。菖蒲が後を追う。

「まあいいけどさ……」

「今は六時ちよつと過ぎか」と宗介。「今日は走らずとも間に合いそうだな」

「でもまあ……」

「走りましょーか」

「そつだね」

そして彼らは走り出した。

第一話「喧嘩屋」その二（後書き）

（今回の名言）

慶一「液体火薬だバーン！」

これからは特に何の事情もなければ二週間に一回くらいのペースで投稿したいですねー。

まだエピローグ書いてないですがとりあえずこれで一話終了です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9578o/>

火事と喧嘩が江戸の華!?

2010年12月28日17時25分発行